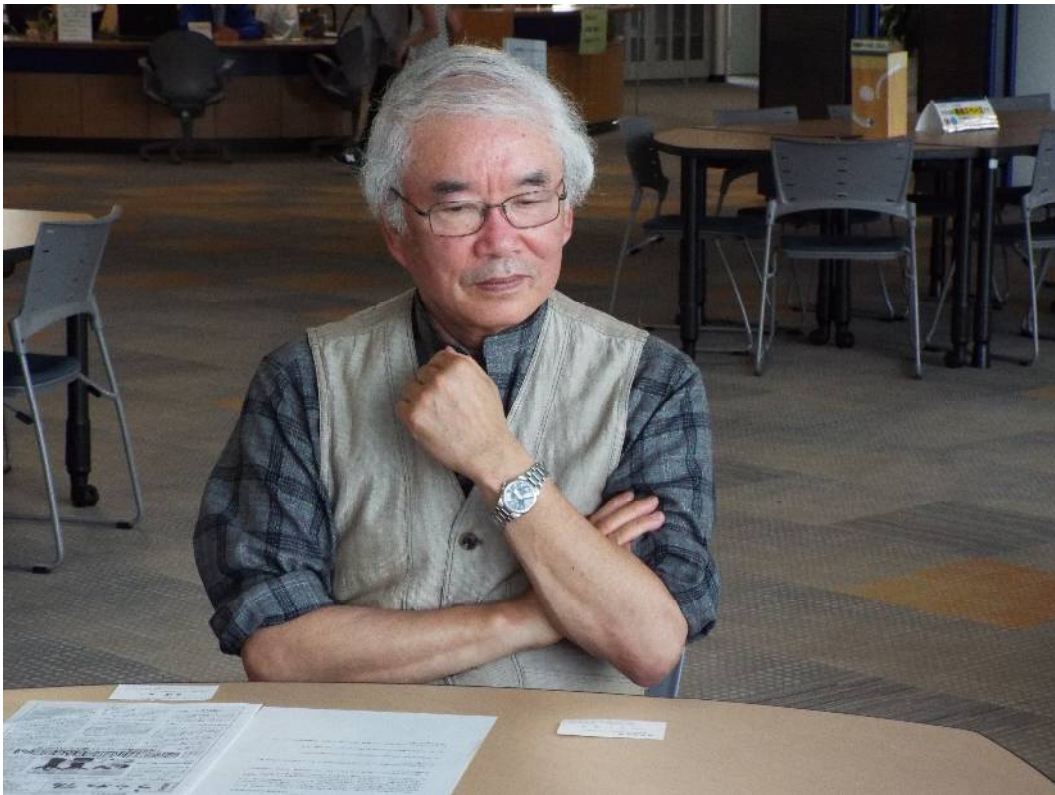


児童文学者 斎藤惇夫さん全インタビュー記録

野党共闘は是非成功して欲しい！！



インタビューに応じていただいた斎藤惇夫さん

編集部では5月1日、児童文学作家で浦和区にお住まいの斎藤惇夫さんにインタビューをお願いしました。斎藤さんの作品「グリックの冒険」「ガンバと14人の仲間たち」「ガンバとカワウソの冒険」はガンバ三部作としてロングセラーとなり多くの児童、教育関係者、父兄に支持され、映画化、ミュージカル作品にもなり影響を与えました。年間100回を超える全国各地での講演や研修などの講師をされています。また、斎藤さんはオール浦和区の会（準備会）の呼びかけ人にもなっています。

さいたま市中央図書館では、埼玉ゆかりのコーナーがあって斎藤先生の殆どの作品が置いてあります。

最初におことわりしておかねばなりません。ウィキペディアで祖父が斎藤隆夫と書かれているのは間違いです。どこに行ってもそのことを言われるので訂正を求めなければなりません。ただ、母方の祖父が田村文吉という国会議員で第二次吉田内閣で郵政大臣をしていたのでそれを間違えて書いているのではないかと思います。新潟の保守系の重鎮で、田中角栄がまだ代議士になる前によく門前に来ていたという話を聞いてます。

—そうだったのですか。先生の書かれていたものを読んでいてもそういう記述がなかったの、変だと思ったのですが。でも政治家の家系というのは間違いではないということですね。

まあ、そうですね。大変な保守系の家系です。そのため60年安保の時は叔父と私は

大変な関係になりましたね。

ー共産党系の評論家からだいぶ批判されていたようですね。内容がヒロイックだとか、暴力礼賛とか。日大全共闘から「同志ですね」と言われたりしたそうですね。

確かにそういうことがありました。でも私としては、あ、そうなんだとむしろ喜びましたよ。70年安保の時は、福音館に勤めていたのですが、よくそういう人がきまして「あなたは同志だ」と言われたのですよ。(笑)

ー私の高校の同級生に立教大学に行って児童文学を研究して、京都女子大学で教授をしている岡田純也という人がいるのですがご存知ですか？

知っています。何度か会ったことがあります。

ー60年安保の時はどうだったのですか？

学生の真っ最中でしたね。デモでは樺さんの近くにいました。主流派とか、反主流とかではなくノンポリですね。今のSEALDSに近いのかもしれませんが。

ー卒業後は電機会社に就職したのですね。

最初の会社は、NEC関係の会社で防衛庁の仕事を担当しまして、胸にマル秘のバッジをつけて仕事していました。潜水艦に等間隔で爆弾を落とすというシステムの輸入を担当していましたが、私のミスで輸入できなくなってしまったのです。防衛庁から大変怒られましてね。

ーどういうミスだったのですか？

まったく輸入続きに関する単純ミスです。でも背景に当時は組合活動が活発で私には暗に反対しようという意識があったと思います。組合全体としてはそういうことはありませんが。でもそれでミスしたわけではありません。たまたまミスしたということです。そういうことがあって、たまたま銀座をふらふら歩いている時に、福音館書店を前にして童話を見たのですね。そのとき「童話をやりたい・・・」と思いました。皆が60年安保を忘れて企業戦士になっていくのを目の当たりにしてそれも嫌だったですね。これではおしまいだと思いました。しかし自分には何ができるだろうかと真剣に考えました。子どもに何を伝えるかということも真剣に考えました。

そのころ石井桃子さんに会いました。

石井さんは本当に素晴らしい方で、例えばある時、「子どもに原爆の話を伝えるべきですか」という内容でのインタビューを英語で受けた時、「日本人としては、きちんと話さねばならないのです」ということを英語できちんと話されていました。そもそも石井さんの紹介で私は福音館に入ったのです。石井さんの知り合いの方に紹介していただいたのですが。

もう一人、浦和競馬場の近くに瀬田貞二さんという方がいましたが、平凡社の児童百科事典を編集した方です。石井桃子さんの岩波少年文庫とあわせてこの二人の方が戦後少年少女にとって、焼け野原を緑野に変える原動力になったと私は今も思っています。瀬田さんはことし生誕100年ですね。

私は常に自分の職業からしか発言してはいけないと思っています。講演や研修に行くと現場の先生達には、平和のこと、日本の政治的な状況をきちんと理解したうえで子どもたちに伝えないといけません、ということまでは言うことにしています。ただ単に、幼児、保育教育をいている人の給料が低いとか、そんなレベルで終わってしまうのではないかと危惧しています。本質的なところまで行かないで、表面的なことでも終わってし

まいます。

こういうことがありました。教育委員会の質問をそのまま子どもたちに発してしまうのです。神奈川県で講演に行ったときですが、神奈川県の教育委員会が、日本がアジアに侵略したと言っているけれども、アジアに侵略した理由の一つにはアジアの人民の為に良くしようとしたという面がある。それについてどう思うか、ということ子どもたちに問いかけているのですね。とんでもないことです。きちんとしたことを教える前にそれをやってしまうということ、ここ5、6年本当に教育界が急が変わってきました。

私の小学校時代の担任の原豊一郎先生は、戦前の厳しい時代を体験した方です。生活綴り方運動をしていて大関松三郎を育てたりしました。子どもたちに作文を書かせていたのです。それがアカだとされ、新婚初夜に拘束され拷問を受けました。その先生が戦後復帰して私達の担任になったのです。良く本をよんでくれました。綴り方教育をした方だというのはあとで判ったのですが、迷いもあったようです。自分で作文を書いて知っていくというのは難しく、しかし知らないと書けないので、作文は間違っているのではないかということ獄中で考えたというのですね。そのためには、まず知らないといけないということで、読みきかせを始めたというのです。それで、宮澤賢二の本を2、3、4、5年と全部読んでくれました。当時はみんなそうだったですよ。いまは、読み聞かせはボランティアがやっているでしょう。あれはいけません。先生自らがやらなければ。

—先生が浦和にこられたのはいつ頃なのですか。

両親は浦和に住んでいました。その前に大臣をやっていた祖父母が住んでいましたね。今の場所です。

—ところでお爺さんの記憶はありますか。

あります。たしか学生の時になくなったのですが、最後は初代の長岡市長をやったので、両親も誇りだったようです。私は否定しなければならなかったから大変でした。でも、その祖父も最後倒れて救急車で運ばれ入院した時、トルストイの「戦争と平和」の7巻を胸に持っていたというのですね。それ聞いて、「じいちゃんやるじゃない」と思いました。面白い人でしたよ。泰然自若とした人ですね。私が高校を卒業した時、「お前は私に反抗さえしていればいいと思っているんだろう」といわれた時はギクッとしましたね。母の姉妹の夫たちには、「よくおまえは平気でおじいちゃんにそんな事が言えるな」と言われましたが、やはり戦後教育を受けた人とそうでない人の違いかもしれませんね。私は戦後教育でしたから。

—先生の原点はどこにありますか。

そうですね。小学校の先生の影響や、60年安保、10歳のころ始まった朝鮮戦争など、色んな影響がありますね。戦後の開放感、未来にはあかりがあると思っていました。今の子どもとは違いますね。ですから朝鮮戦争のときは驚きました。戦後の解放からずっと明るい未来を信じていましたから。それで、担任の先生から、「戦争って何だろう」と言われ考えさせられました。そのころ岩波少年文庫を読んで、本っていいな、物語っていいな、平和を考えている人は一番素敵なのだと思います。みんなと一緒に生きていくのだということ学んでいましたね。当時、オランダの物語でしたが、それを読んで、ああオランダもそうなのだなと考え、手紙を書こうとしましたが、日本は何をやっ

てきたんだろう、ということを考えさせられました。そして親も軍事政権に賛同したんだ・・・ということが、心の中につきささりました。それは、5年生にしては、少し早すぎる認識かもしれませんが、少し考えればわかることです。感動する物語、アンネの日記もそうですが、ナチスに抵抗して死んでいく家庭ではなく、政府に抵抗することなく進んでいく両親という構図になってしまいましたね。でも、当時の子どもはみんなそうですよね。

—私は、子どものころそこまで考えていませんでした。(笑)

子どものころの元体験を思い出さないといけないし、色んな準備は必要でした。大江健三郎さん、谷川俊一郎さんなどと会う時はとても緊張しました。原発のときもそうです。一緒に研究会に入って調べたりするのですがいい加減なことはできません。

—民主的な大人になってもらうには、子どもの時からどうしないと行けないかということに気付いたのですね。

そうですね、比較的早いうちに。でも同時代の人は皆そう思っていたのではないでしょう。それを叶えるのは戦後教育だ、と思い感じていました。私が小学校に入った時に、カタカナがひらがなになったのですが、調べたことはないのですが、何故なのか興味があるところですね。

—この一年で随分違います。尺貫法とメートル法が併用しています。

私は尺貫法はだめですね。5年上の先輩たちは先生が無様になる姿を見ているでしょうが、私はそれを見なかったですね。最も民主主義的な時代であったかもしれませんが、何するにも議論して決めたりしていました。

—直接戦場に駆り出された世代ではなかったことも影響あるかもしれませんね。家庭ではどういう感じでしたか。

祖母には新潟県越後地方の民話を聞かされました。根雪になるぞと感じた日から11月、12月、1月、2月は昔話の時でした。祖母の昔話、今思うと、個々の人達が自立していく話なのですね。生きる術を教えるようなものが多い。生きていく、といことの面白さ、楽しさ、究極的には一人ですが、皆で生きていくということが語られる。今、子どもの心は作り上げるというのではなく、子どもの心はこう出来ているという教え方をしますね。それはおかしいと思います。

母は、グリムを読んでくれました。日本の昔話と違うんですね。日本の昔話は、最後に鶴になって飛んで行ってしまふところを呆然と見つめながら幕が閉じる。グリムは、何か悪いことがおきると、魔法を使って、幸せを勝ち取っていく。小学生になってだんだん大きくなってくるとグリムの方がいいと思うようになっていくんです。そういうものをたくさん読んだり、読んでもらっていると、おのずから個々の人が生きていく、お互いに見守っていくという心が作られるということになると思うんですよ。

色んな育ち方でいいと思います。祖母が昔話を語ってくれるときは、いつも栗を焼いてくれたんです。三つ位話をしてくれると、ちょうどいい具合に栗が焼けておいしい匂いがしてくる。あの甘い味は今も忘れられません。何故忘れないかという、他に甘いものがなかったからなんです。母は少しのザラメ砂糖でカルメを作ってくれました。私は苦い思い出なのですが、母に明日ももっと作ってくれと頼んだんです。すると母は急に悲しい顔をして、号泣したのです。戦争さえなければ、飴玉もある、キャラメルもある、バナナだってあると号泣したんです。私は悪い事を言ってしまったと思いました。

いつかそのことを詫びようと思いつつ、15年前に他界してしまいました。私は天国に行けるかどうか判りませんが、あの世に行ったらそれを詫びようと思っています。

偶然とは言え、祖母も母も本気になって子どもを育てようと思っていたのだと今になって気がつくのです。石井桃子さんも瀬田貞二さんも本気になって子どもを育てたいと思っていたのだと思います。それが今どうでしょう。絵本は商売になってしまっている。教師もボランティア任せで本気になって考えていない。どうも本質を忘れているように思えるのです。

ヨーロッパでは10才位になるまで読んでもらうことを読書というそうです。子どもは本の世界に入って主人公になってしまいますから、背後に誰かがいないといけないという考え方なのです。フィンランドの子どもは今でも一日15分は父親に本を読んでもらっているそうです。父親も子どもと一緒に楽しむ時間なのです。フィンランドの子どもには、メディアの危機がありません。

一個人を大切に作る国民性ということですね。私もそれを感じたのはフィンランドでは、昨年、“できるだけ格差をなくすため一律に公的資金を支給することについてどう思うか”、という調査で8割の人は肯定的な回答してきたとのことで感心しました。

条件が悪くなる人も出てくるけれどもそういう人も含めて肯定的のようですね。日本で若い人に一番住んでみたいところを聞くと、一昔前まではカナダだったのですが、今はノルウェーと答えています。15年前の数字ですが、年金は一番低い人でも一律20万支給する。ただ消費税は高いです。昔話は父親が中心にする、文化を子どもたちに伝え続けるというのは、父親の役割だという。日本はこれを見習わないと行けないのではないのでしょうか。

一政治、選挙の話題になりますがズバリ政治活動については如何でしょうか。

金曜日の国会デモに行く位ですが、原発事故以来行っています。行くと私と同じ位の年齢の人が多くいて嬉しくなります。聞くと孫の為にとという人が多いですね。やはり60年安保で挫折した人達ではないかと思えますね。s e a l d sの「民主主義ってなんだ」、そして胸に手をあてて、「ここだ」。これは共感しますね。ただどこまで持つかという心配はありますが。

一参院選めざし野党共闘の運動が盛り上がっていますがどうお感じですか。

共産党の今回の共闘への提案は良かったですね。野党共闘は是非とも成功して欲しいと思います。共闘して本当に力になるかどうかということはあると思いますが、別にダメになってもこれから同じことをしていかなければならないわけですから案ずることはありません。あと、“共闘の中から誰かヒーローやヒロインが出るのを待っています”、なんて言う人がいますがそれは嫌ですね。ヒーローやヒロインはいなくていいんです。人任せということになりますからね。

一共産党への注文やご意見がありましたらお聞かせ下さい。

私の家でも共産党のポスターを貼っています。それと、赤旗も日曜版ですが購読しています。妻も熱心に読んでいます。私は以前、赤旗に書評を書いたこともあるんですよ。

一それは大変ありがたいと思います。ところで、童話を書くのは5つまでと決めているそうですが、どうしてなのでしょう。

全力振り絞っても5つしかないという自分に対する自覚です。子どもに感動した本がたくさんありますが、そして、自分の書いたものがそのレベルに達しているかどうか判りませんが、5作が限度です。

—動物に託したというのはどういうことでしょうか。

人間だと、「愛してます」というと何か嘘っぽくなりますが、動物だと素直に言えるんです。あと、宮澤賢治の影響がありますね。

—児童文学以外にお書きになるということはありませんか。

全然考えた事はないですね。子どもに感じた感動以上のことがなかったことによります。なくなられた河合隼雄さんと親しかったのですが、河合さんの言葉に、「子どもたちが宇宙にいることは誰でも知っているが、子どもたちに宇宙があることを知っている人はどれだけいるだろうか」というのがあります。まったくその通りだと思います。そういう宇宙を知りたいと思ってやってきました。

—先生は地元浦和でも講演を依頼されることが多いと思うのですが、如何ですか。全国を回っていてほとんど浦和におられないとも伺っていますが。

浦和でも結構話していますね。幼稚園や保育園、図書館によく呼ばれます。教会にある幼稚園の2Fで絵本大学というのを毎月2回開いています。NPO団体のある方に、子どもについて書いているあなたが浦和で何もしないのはけしからんと言われて参加しています。全国的には、殆どボランティアですが小学校の教師の研修会の講師で行くことが多いですね。北海道から九州まで年間100回以上は行っています。小学校の先生には二つのことしか言ってません。一つは生徒にはボランティア任せでなく自分で読み聞かせをして下さいということ、もう一つは感動しない場合は、その生徒の幼稚園まで行ってどういう本を読んだのか調べて下さいということです。それによってどうしたらいいか分かってきます。本離れしているなどという前にそれをやって下さい、と。ただ、今の先生は孤立していますね。大変だと思います。文部行政に問題があると思います。まずは、教育委員会を見直さないといけません。

本日は長時間大変ありがとうございました。

なおこの日編集部は三人でおうかがいしましたが、斉藤先生は児童文学の作家らしく終始子どもたちのことを考えてお話しされていることに一同敬服しました。いつか講演会を開いていただきたいと思った次第です。